福山大学　大学教育センター　大学教育論叢
創刊号（2014 年度）　2015 年 3 月発行

初年次教育における哲学・倫理学教育の重要性

上村　崇　　神崎宣次　　紀平知樹　　小城拓理　　本田康二郎

初年次教育における哲学・倫理学教育の重要性

上村　崇*　神崎宣次**　紀平知樹***　小城拓理****　本田康二郎*****

The Importance of Philosophical / Ethical Education in First Year Experience

Takashi UEMURA*　Nobutsugu KANZAKI**　Tomoki KIHIRA***
Takumichi KOJYO****　Kojiro HONDA*****

ABSTRACT

In this paper, we try to advocate the importance of philosophical / ethical education in First Year Experience. So we present four practical reports in First Year Experience (Shiga University, Hyogo University of Health Sciences, Aichi Gakuin University and Kanazawa Medical University). These reports were written by Philosophers that are engaged in each First Year Experience. Through the analysis of these reports, we try to connect First Year Experience with philosophical / ethical education, especially the method of “critical thinking” and “philosophy for children”.

キーワード：初年次教育、哲学教育、倫理学教育、クリティカル・シンキング（CT）、こども哲学（P４C）

１．はじめに

初年次教育は､1970 年代から 1980 年代にアメリカの高等教育機関で導入されてきた“First Year Experience”を日本に輸入するかたちで日本の大学に広まってきた（初年次教育学会 2014：29-31）。日本で「初年次教育」という用語が公式に使われたのは 2008 年 12 月の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築にむけて」である。文部科学省は初年次教育を下記のように規定している。

高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム。高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新入生に最初に提供されることが強く意識されたもので、1970 年代にアメリカで始められ、国際的には「First Year Experience（初年次体験）」と呼ばれている。具体的内容としては、（大学における学習スキルも含めた）学問的・知的能力の発達、人間関係の確立と維持、アイデンティティの発達、キャリアと人生設計、肉体的・精神的健康の保持、人生観の確立など、大学における教育上の目標と学生の個人的目標の両者の実現を目指したものになっている。（文部科学省 HP）

現在、初年次教育を実施する大学は 80％を超えており、2008 年には初年次教育学会も設立し、学術的な蓄積もすすんでいる。

本論考は、大学初年次教育に哲学・倫理学教育がどのように貢献できるか検討することを

*大学教育センター非常勤講師・福山平成大学　**滋賀大学　***兵庫医療大学　****愛知学院大学　*****金沢医科大学

目的とする。そこで、まず、大学で初年次教育を担当している哲学・倫理学者４名に（１）所属大学（２）初年次教育の位置づけ（３）初年次教育の実態（４）初年次教育と哲学教育・倫理学教育との関係性について報告してもらう。そして、初年次教育において、哲学教育・倫理学教育が果たす役割についてクリティカル・シンキングとこども哲学という観点から論じる。この分析を通して、初年次教育におけるプログラム作成で、哲学教育と倫理学教育が果たす役割について提示したい。

２．初年次教育の取り組み（１）滋賀大学（神崎宣次）

（１）所属大学のデータ

大学の特色としては、教育学部と経済学部の二学部だけからなる最小構成の国立大学法人であり、なおかつキャンパスが二つに分れている点を挙げることができる。そのため日常的な教育に関しては、学部毎の独立性が高い。教員養成系はカリキュラムに特有の制約が多いという事情もあるので、以下では教育学部についてのみ述べる。

また教育学部では平成２７年度に改組が行われるが、一学年の学生数に大きな変化はなく、定員は二百四十名となる。

（２）初年次教育の位置付け

「教育学部のカリキュラム・ポリシー」の第二項に、「社会・文化・自然・環境についての幅広い知識を身につける教養教育科目、学校教育に関わる基本的知識を身につける共通教職科目、得意分野の力を伸ばす専門的科目を適切に配置し、初年次教育から卒業研究に至るまでの体系化を図る」という規定がある。ここでの「初年次教育」は単にカリキュラムの一年目を指しているように思われる（ただし、ここで参照しているカリキュラム・ポリシーは前述の改組をまだ反映していないものである）。

（３）初年次教育の実態

狭い意味での初年次教育を目的とした授業は「大学入門セミナー」という名称で、二十名程度のクラスを単位として全新入生（および再履修者）を対象に春学期に行われている。筆者は今年度からそのうちの一クラスを担当し、次年度からの授業内容を検討する委員にも加わっている（全三名）。

内容はこの種の授業として標準的なものといえるだろう。シラバスから引用すれば、この授業の目的と概要は「大学での勉学に必要なスタディ・スキルとシンキング・スキルを学ぶことを目的とする。具体的には，授業の受け方・ノートのとり方，本の読み方・文章の読み方，資料の収集と整理，レポートの書き方・文章の書き方，発表の方法・討論の方法，批判的に考える技術である・・・」とされている。また授業用テキストは学内作成のものを使用している。

（４）初年次教育と哲学教育・倫理学教育との関係性

筆者個人の見解として、将来の教員を目指す学生に対しては大学教員によって提供される授業という場において討論できる能力を育成するだけでは不十分と考える。教室という「探求の共同体」（マシュー・リップマン 2014） における知的な安全性を確保する必要性の理解とその実現能力という、一段階上の能力の育成が必要となる。批判的な思考能力に関しても、将来的にそのような能力の育成に携わる教員を養成するという観点が授業コンセプトに組込まれるべきだろう。しかしながら現在の「大学入門セミナー」は、前述のとおり大学入門的な授業の一般的な内容に留まっており、教員の養成に固有の内容や目標を備えたものにはなっていない。この点の改善に取り組むことになれば、近年日本でも紹介と実践が進んで

いる哲学教育の知見が参照・活用されるべきだろう。

３．初年次教育の取り組み（２）兵庫医療大学（紀平知樹）

（１）所属大学のデータ

兵庫医療大学は、開学7年目の比較的新しい大学で、医学部を擁する兵庫医科大学の姉妹校として、薬学部(６年制)、看護学部、リハビリテーション学部の3学部からなる大学である。定員数は薬学部150名、看護学部100名、リハビリテーション学部80名となっている。在学生数は1620名である（2014年5月1日現在)。

（２）所属大学における初年次教育の位置づけ

兵庫医療大学では、アカデミックリテラシーを大学での学び方を学ぶことを一つの目的としつつ、また本学全体の教育目標でもあるチーム医療の基盤を形成するための科目として位置づけられている。したがって、ただ大学生としての学び方を学ぶだけでなく、医療人としての振る舞いも到達目標に含めている。

（３）初年次教育の実態

兵庫医療大学では、「アカデミックリテラシー」という授業科目で、週2時間15週の30コマで、1年生全学部必修（履修者は360名程度）で、挨拶やマナー教育、図書館の利用法、情報機器の利用法、ノートの取り方、文章の読み方、レポート作成方法、PBLやLTD等の共同学習の手法を取り入れたグループワークを行っている。教科書としては、共通教育センター教員で執筆した『医療系大学生のためのアカデミックリテラシー』（二瓶社）を用いている。

（４）初年次教育と哲学教育・倫理学教育との関係性

文章を読んだり、レポートを作成する際に、クリティカルな視点が必要であり、そこに哲学の批判的精神が活かせるのではないかと思う。また、チーム医療教育では職種を超えたコミュニケーションが要求されるが、その際にもやはり、お互いの立場の差異、語彙体系の差異などに気をつけてコミュニケーションをしなければ意思疎通が困難になる。そこでもやはり、批判的精神が活かされるのではないかと考えている。

４．初年次教育の取り組み（３）愛知学院大学（小城拓理）

（１）所属大学のデータ

筆者が所属する愛知学院大学は仏教系の私立大学である。もともと曹洞宗の僧侶を養成する学校として 1876 年（明治 9 年）に開学した。四年制の大学となったのは戦後のことである。現在、愛知県内にある四つのキャンパスに九つの学部を設置している。大学病院もあり、中部地方では最大規模の大学である。学部構成は文学部、法学部、経済学部、経営学部、商学部、心身科学部、歯学部、薬学部、総合政策学部であり、短期大学部も設置されている。

大学公式ホームページによると、11269 人の学部学生がいる（2014 年 5 月現在)。筆者が所属する総合政策学部には 984 人の学部学生がいる。このうち一年生は 235 人である。

（２）所属大学における初年次教育の位置づけ

総合政策学部における初年次教育は「リサーチ・プロジェクトⅠ」と題されており、全員必修の科目となっている。

（３）所属大学における初年次教育の実態

リサーチ・プロジェクトⅠでは、まず総合政策学部の学生全員を 12 のクラスに割り振る。

一クラスはだいたい20人弱である。その上で各クラスに担任として教員一人とTAを配する。そして、週一コマの授業を前期15コマ、後期15コマ、通年で計30コマ行う。総合政策学部は教育目標として、問題解決能力の育成を掲げているため、カリキュラムの内容は極めて実践性の高いものとなっている。前期はノートの作り方から図書館の利用方法、本の読み方、付箋の使い方、レポートの書き方、グループ分けをした上でプレゼンテーションの仕方を学ぶ。後期はグループごとで社会問題の一つを研究テーマに選び、その解決のための方策を提案してもらう。その際には社会問題の解決に実際に取り組む機関・団体へのインタビュー調査が義務付けられている。そのため、教員は調査対象への電話のかけ方から依頼状及び礼状の書き方まで指導する。ちなみに、筆者が担当したクラスの学生は、愛知県警や長久手市保健センター等を訪問している。

（４）所属大学における初年次教育と哲学教育・倫理学教育との関係性

筆者はいわゆる政策系学部に所属し、初年次教育を担当している。その経験からすると、初年次教育において哲学・倫理学教育は重要な一要素となっているように思われる。まず、文章の読み方や書き方、議論の仕方の習得は広い意味における哲学教育の一環であろう。また、レポートやプレゼンテーションの作成の際の盗用及び剽窃の禁止の指導には情報倫理教育の側面がある。その意味では、政策系学部においても、哲学・倫理学教育を行う意義はあると思われる。

５．初年次教育の取り組み（４）金沢医科大学（本田康二郎）

（１）所属大学のデータ

金沢医科大学は医学部、看護学部からなる大学であり、学年人数はそれぞれ約１００名、約８０名である。比較的小規模な大学でありながら、４８０名余りの教員を擁し、手厚い教育が行われている。

（２）所属大学における初年次教育の位置づけ

本学の医学部学生は良医となるために、医学の専門知識・技能を身につけるだけでなく、幅広い教養を持った感性豊かな人間性、人間性への洞察力、倫理観、生命の尊厳についての深い認識などを持つことが求められる。こうしたことを踏まえ、初年次には次のような教育目標を掲げている。

一般教育科目の教育目標

学生は「良き医療人に必要な自立と自律の獲得」のために、次の事項を身につけることを目指す。

１，豊かな人間性と多様な考え方
２，主体性と自己管理能力
３，コミュニケーション能力
４，論理的・科学的思考能力
５，知的好奇心と自己開発への意欲

（３）所属大学における初年次教育の実態

・「医学セミナー」（５０分・１６コマ、１０４名受講）

学長をはじめとした本学役職教員ならびに、各地でご活躍の卒業生に講演頂き、本学に対する理解を深めるとともに、自らの将来像について考え、自己開発への意欲を啓発する。

・「大学基礎セミナー」（５０分・４５コマ、１０４名受講）

少人数グループでのテュートリア　ル形式を中心に行われ、グループ討論のなかで学生自

ら問題を発見し考え解決する能力を養う。またプレゼンテーションスキルを養う。
・「アカデミック・スキルズ」（５０分・３０コマ、１０４名受講）
課題学習にそったディスカッションによりコミュニケーション能力を高め、文献検索の方法、ハンドアウトの作り方、学術文献を執筆するトレーニングを行う。
・「クリティカル・シンキング」（５０分・３０コマ、2015 年度開講予定）
与えられた問題を批判的に分析する態度を涵養し、互いの考え方を批判しあうことで論理的思考力を高める。また、自分達の書いた学術文献を互いに批評しあう力を養うことを目指す。

（４）所属大学における初年次教育と哲学教育・倫理学教育との関係性

本学医学部の教育理念の一つが「良医の育成」である。そして、この良医という言葉の中に倫理の要素が当然含まれている。本学の元学長であった小田島粛夫はこの言葉の定義を次のように述べた。

「良医」に求められるもの（小田島 2001：14）

A) 基本的に重要な医学知識と医療技術
B) 進歩し続ける医学や医療技術を生涯を通して学び続ける意志と能力
C) 倫理に徹した豊かな人間性

そして、学生がこうした条件を身につけるのに、何より欠かせない能力が「考える」力であるということが指摘された。

「考える」ことの重要性

自学自習の基本となるものはいうまでもなく「考える」という行為である 。（同上 18）

大学における教育は「育て、育む」ことであり、現在の学生を対象とする場合は「考える」こと、「考えることを身に付けさせる」ことが基本であり、とにもかくにも学生をパスカルの「考える葦」に変えることが必要である 。（同上 44ff.）

本学の初年次教育の最大の目標は、学生に対して主体的に考察する態度と習慣を身につけさせることにあり、これが倫理的な批判能力の涵養につながると考えられている。

来年度より、Project-Based Learning の手法と、Academic Writing、Critical Thinking の手法を有機的に接続する新しいカリキュラムが始動する。学生が批判精神を身につけ、活発に議論する気風を、大学内に生み出していくための新たな試みである。

６．初年次教育と哲学・倫理学教育（上村 崇）

（１）初年次教育と哲学教育 ―共通プログラムによる「良き学習者」の育成

初年次教育と哲学教育との関係性について、すべての報告者が指摘していることは、文章読解力やレポート作成力、議論を進行していく能力として哲学教育が有効であるということである。確かに、情報を鵜呑みにせず、批判的に考える「クリティカル・シンキング」は初年次教育においても大いに役立つであろう。さらに神崎（滋賀大学）は議論を深化させていく能力を育成するうえで、「探求の共同体」など哲学教育の実践を参照することが重要であると指摘している。初年次教育と哲学教育を接続するために、「クリティカル・シンキング」と「こども哲学」について紹介していくことにする。

１）クリティカル・シンキング

クリティカル・シンキング（以下 CT と略記）は、「ある意見を鵜呑みにせずによく吟味すること」（伊勢田 2005：11)である。「批判」とは、意見を「否定」することを意味することとは本質的に異なる。自分や他人、社会の意見を客観的に検討することで、その意見を受け

入れる確固たる理由が存在するか判断することが CT では肝要である。ゆえに、CT はディベートのように自分たちが主張する立場を擁護することに全力を傾け、勝敗を判定する議論の形式とは本質的に異なる。また、CT を個人的な思考法と捉えることも可能であるが、個人的な実践に閉じ込められた思考法ではない。CT では、ある意見が主張される根拠を多面的に検討することが求められる。その際に、自分と意見を同一にする他人の異なる根拠を検討することが必要であるし、自分と異なる意見の根拠を検討することで、自分が主張する意見に検討を加えることも必要である。CT には、相手の意見を筋道の通ったかたちで理解して再構成する「思いやりの原理(principle of charity)」（同上 48ff.）と、相手と議論を深めていこうとする「協調原理(principle of cooperation)」(同上 52ff.)がある。CT のスキルを学ぶということは、CT の思考法を学ぶということだけではなく、ほかの人々と協力してひとつの意見を検討していくという協力的な態度を身につけるということでもある。

伊勢田は CT を修理型クリシンと改築型クリシンに区別して説明している（伊勢田 2005：11f.)。修理型クリシンは、心理学的 CT とも呼ばれ、おもに心理学者が日本に紹介している。心理学的 CT は「早まった一般化」、「偏ったサンプルの一般化」など思考の誤謬や陥穽を取り扱う 。わたしたちは、自分の周囲にある情報や自分の価値観に適合しているサンプルを一般化して意見の根拠とすることが多い。そのときわたしたちは、「早まった一般化」、「偏ったサンプルの一般化」に陥っている危険性がある。心理学的 CT を学ぶことは、こうした主張が誤謬であるということを学び、自らの思考法に誤りがある場合はそれを修正する契機を創出する。さらに、他人や社会のなかでこうした誤謬にもとづいた主張がなされているときに、対話のなかでその誤りを正す契機を創出することになる。改築型クリシンは、哲学的 CT とも呼ばれ、わたしたちの意見を土台から根本的に検討する。哲学的 CT の対象は議論である。議論とは(１)おもな主張（結論）（２）理由となる主張（前提）（３）前提と結論のつながり（推論）という３つの要素から成立している。哲学的 CT の基本は、この３つの要素を明確にして、（２）や（３）が本当に妥当かどうか吟味することである。つまり、①議論の明確化②前提の検討③推論の検討が哲学的 CT の基本となる(同上：25−33)。

心理学的 CT はわたしたちの認知バイアスを修正するために有効であり、哲学的 CT はわたしたちの意見を根底から問い直し、再検討するために有効である。いずれも文章を読んで評価する場面や、レポートを作成する場面でとても大切なものである。また、CT は汎用性に富み、すべての初年次教育に適用することが可能である。道田は初年次教育への CT の導入を「良き学習者の育成」と位置づけている（道田 2011：187-192)。道田は「良き学習者」を育成するために、思考を促す５つのポイントを示している。それは、①他者との対話 ②経験できる場づくり ③ アウトプット ④知識 ⑤教師自身の思考である。道田のポイントを簡潔にまとめると下記のようにまとめることができるであろう。思考を促すうえで、他者との対話を重視し（①)、経験するなかで思考と対話をする場所を作っていくことを目指しながら（②)、学習者に自らの見解を発表してもらう（③)。 ただ、①～③を実現するためには思考や対話の対象となっている事象に関する知識（④）も必要であり、教授的な思考法は①～③の文脈のなかで捉えられるべきである。さらに見過ごされがちなのは教師自身の思考（⑤）である。教師が知識を教授する権威ある伝達者として振る舞うのではなく、学習者自身の発言の差異や共通点を見出しながら、対話を深めていくことが教師には求められ、教師も対話の参加者として思考することが求められるのである。

初年次教育において、CT はよき学習者を育成するために大きな効果をもたらす。CT の教育実践が効果を持つためには、教師も「思考する教師」としてともに思考し、対話する存在となる必要がある。対話の方法と環境づくりについて大きな示唆を与えてくれるのが、こども哲学の教育実践である。

２）こども哲学

「こどものための哲学”Philosophy for children”（以下 P4C と略記）」は、コロンビア大学のマシュー・リップマン Matthew Lipman(1922-2010) 教授が考えたこどものための哲学教育プログラムである。1960 年代後半のアメリカでは社会問題が表面化して、様々な対立が起っていた。言葉の意味をじっくりと考えて発言することが少なくなっているなかで、価値や考えが対立したときにでも、こどもが「自分で考える」技術を身につける教育プログラムの作成に関心があつまってきた。リップマンは 1972 年から P4C のプログラムを広めている（http://p4c.com）。

日本に P4C を広めている河野は、P4C で鍛えられる思考力は、下記の３つの思考力を兼ね備えた多元的思考力であると述べる（河野 2014：81-91）。

①批判的思考力：論理的・客観的にものごとをとらえるちから
②創造的思考力：新たな発想をうみだすちから
③ケアする力　：テーマやお互いの発言を気遣うちから

この多元的思考力は、「対話」を通して育成される。この対話を実践する場が先の報告で神崎も指摘した「探求の共同体」である。ひとつのテーマについて、対話を通して掘り下げていくのが探求の共同体である。探求の共同体では、ひとを傷つけない限りであれば、どのような発言であってもバカにされたり排除されることなく、検討に値するものとして取り上げられる「知的な安全性（intellectual safety）」が堅持されなくてはならない。対話は、おおよそ次のような流れに沿って展開される（同上：121-134）。

① 対話のルールの説明（よく聴く・ゆっくり考える＝知的な安全性の保障）
② テキストを読む（絵本や映像、絵画を使うこともある）
③ テキストから、対話のテーマをきめる
　テーマの分類　テーマの設定　適切さの確認
④ 探求的な対話をする
　対話の進行役が対話の進行を調整して対話を深める
　対話を深める（検討する観点）：意味の明確化・理由・証拠・真偽・一般化・前提・含意
⑤ 対話をふりかえり吟味する
　対話への反省と自己評価

P4C は、探求の共同体での対話を通して、現実の事象や対話する相手を気遣いながら（ケアする力）、現実の事象や相手の意見を批判的に検討して（批判的思考力）、現実をこれまでよりもよいものへと変革する（創造的思考力）多元的思考力を育成することを目標とする。また、この哲学実践は道田が CT の導入により示した「良き学習者」の育成とも重なるものである。CT も P4C も「良き学習者」の育成という観点から初年次教育に貢献するといえる。

（２）初年次教育としての倫理学教育 ―大学・学部別プログラムによる専門職倫理の涵養

初年次教育への哲学教育の貢献は明らかとなったが、倫理学教育は初年次教育にどのように貢献するであろうか。レポート作成時における情報の取り扱いについて、著作権やプライバシーなどの情報倫理学が貢献するという小城（愛知学院大学）の指摘は傾聴に値する。情報の取り扱いについては全学的な共通プログラムとして展開可能であろう。ここでは、医療系大学に所属している紀平（兵庫医療大学）と本田（金沢医科大学）の指摘に注目したい。

紀平はチーム医療教育としてコミュニケーションスキルを育成することが初年次教育では必要であると指摘している。さらに本田は、大学の教育の理念に「良医の育成」が掲げられており、そのなかに倫理の要素が含まれていることを指摘している。各大学、学部の教育理念のなかに、倫理の要素が含まれていることは想像に難くない。教育理念に掲げられている倫理の要素は、各大学、学部が「良き社会人」の育成を図るとともに、「良き専門家」の育成を図ることを教育目標として位置づけていると考えられる。

哲学教育が全学共通プログラムの初年次教育として効果を発揮するのに対して、倫理学教育は、各大学、さらには各学部ごとの倫理性を涵養する教育として効果を発揮すると位置づけることができるであろう。しかしこのことは、哲学教育にもとづいた初年次教育と倫理学教育にもとづいた初年次教育が、まったく別のプログラムとしてデザインされなくてはならないということを意味するわけではない。むしろ双方のプログラムが相互補完的な役割をになうことで、初年次教育は充実したものになると考えられるであろう。実際、初年時教育においてCT/P4C を実践するうえで､テーマの選択など具体的なプログラムをデザインするためには、各大学、学部がどのような社会人、専門家の育成を目指すのかという倫理性を参照することが必須になる。つまり、初年次教育のグランドデザインを作成するうえで哲学教育は役立つのに対して、実際の教育の内容を選択して実行するうえでは倫理学教育が役に立つのである。

７．むすびにかえて

初年次教育における哲学教育と倫理学教育の相互補完的なプログラムを構築するためには、今後さらなる調査が必要である。また、哲学教育や倫理学教育を基盤とした初年次教育を哲学・倫理学者が担当するべきかどうかという問題も課題として残っている。しかしいずれにせよ、初年次教育を充実したものにするためには、担当教師が「思考する教師」でなくてはならないことは明白であると考えられる。

本論文中、「６．初年次教育と哲学・倫 理学教育（上村 崇)」は科研費研究活動スタート支援 （研究課題番号：25884088 研究代表者：上村崇)「クリティカル・シンキングにもとづいた道徳教育プログラムの開発」の成果の一部である。

参考文献

伊勢田哲治（2005)『哲学思考トレーニング』ちくま新書
小田島粛夫（2001)『良医を育てる 金沢医科大学の挑戦』金沢医科大学出版局
紀平 知樹(編集)（2013)『医療系大学生のためのアカデミックリテラシー』二瓶社
河野哲也(2014)『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』河出ブックス
初年次教育学会（2014)『初年次教育の現状と未来』世界思想社
マシュー・リップマン,河野哲也・土屋陽介・村瀬智之監訳（2014)『探求の共同体-考えるための教室-』玉川大学出版部.
道田泰史・楠見孝・子安増生編（2011)『批判的思考力を育む-学資力と社会人基礎力の基盤形成』有斐閣
M.Lee Upcraft / John N.Gardner / Betsy O.Barefoot,山田礼子完訳（2007)『初年次教育ハンドブック－学生を「成功」に導くために』丸善株式会社